

# ニッポン ドクター和の 臨終図巻



長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

「急死」の二文字が躍りました。女子アナブームの火付け役となったタレントの有賀さつきさんが1月30日に亡くなっていたことがわかりました。52歳でした。

急死という言葉には誰もがショックを受けます。また若く美しい方だった場合はなお一層のこと。

医学において、急死とはすなわち突然死のことです。健康に見える人が急速に死に至ることを言います。世界保健機関（WHO）の定義では瞬間死、あるいは発病後24時間以内の内因死（交通事故など外因死は含まれない）とされています。しかし有賀さんの死

## 41 有賀さつき



「数年前から病気を闘っていた様子」とあります。ここ1〜2年はかなり痩せて、カツラ姿でテレビ出演されていたこともわかっています。つまり、急死ではないのです。本人ではなく、メディアにとって急な知らせだったから「急死」と書かれてしまったのでしょう。

さらに有賀さんは、自身の病名を公表せず、病院にも死後も決して詳しいことは明かさぬように、とお願いをしていたようです。その意思は徹底しており、近しい友人も、ご家族にも知らされぬままだったとか。ネットでは、死因についてさまざまな憶測が飛び交っているようです。しかし、いったい、いつから有賀さんは病気を公表することが半ば義務となってしまうのでしょうか。公人だから？ いいえ、芸能人は公人ではありません。公人とは議員や公務員のことを言います。

昨年亡くなったフリーアナウンサーの小林麻央さんのようにブログで経過をつづることを生きた勇気に変える人もいます。しょうし、その逆で隠し通すことで生きていける人もいます。

# 強く賢く叶えた「平穏死」

有賀さんは昨年末までに銀行口座を整理し、今年からの仕事は介護を理由に断るなど、人知れず「終活」を行っていました。なんと強く賢い女性なのでしょう。世阿弥の「秘すれば花なり」という言葉を彷彿とさせる逝き方です。

おそらく、最期を託す医師についても納得いくまで、ご自身で探していたような気がします。

お父さまの話によれば、病院に入院したのは最期の2週間だけで、死ぬ間際まで、普通に会話ができ、一人でトイレにも行っていたといえます。つまり有賀さんは、急死どころか、完璧な平穏死をされたのではないのでしょうか。

どういった最期を迎えたいのか、しっかりとイメージされ、延命治療を希望しないことも医師に伝えていたのでしょうか。そうすれば、自宅でなく病院でも平穏死はかなうということを、有賀さんは教えてくれました。

かく言う私も医者の不養生で、もし自分がかんになったら、誰にも明かさなにかもしれません。だから有賀さんの気持ちが、なんとなくわかるのです。